



景清外傳

三編

三

^ 13
2891
13

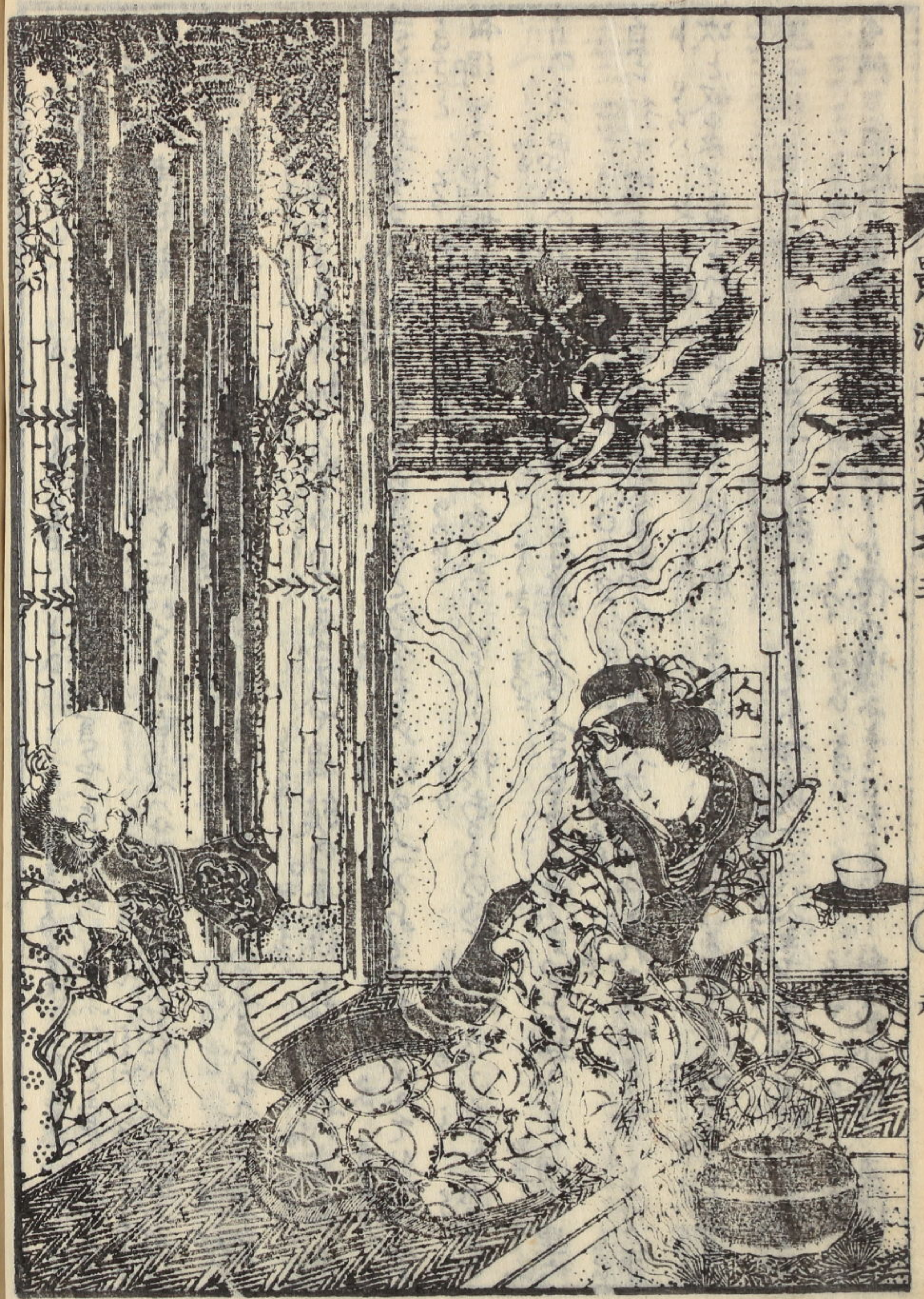


然るに二月十三日思ふや、阿古屋がり、暫時あひ止りしが、十二日、女池に伸吟、
 時秋は、情を、所を、女池に定まれば、昔の思ひや、報ひつ、
 阿古屋が、る、損失を、今と、ふ、取戻さんと、思へども、既に、
 入丸を、我家の、女と、する、時、前の、年の、損失、
 何と、熟く、縁、
 戸平次が、
 古屋が、失、
 今春の、
 是

定まり、命、
 女池の、
 我、
 阿、
 日暮、
 宿、
 大、
 宿、

長門三編 卷之三

三



旅の盲者の宿も悩まぬ人丸宿を乞居まは十三垣の外よりして契光景を空程入
 て情なき小似はれども。入旅をとらぬ契里の披るれば。小嘆きなきは。よま
 へあつて。浦あれ盲者の暮るる宿る方。く悩むを。て。退去し。我ハ又心
 人丸我小同金。一宿貸するの。め。ま。と。れ。が。あ。り。還。る。お。り。と。只。有。小。法。不。牙
 を。深。め。求。理。の。中。を。察。し。ひ。人丸盲者小回。心。不。叔。父。の。還。る。を。待。た。せ。れ。ば。い。這。裡。の
 入。り。て。休。ひ。ぬ。と。云。を。は。ま。り。も。あ。り。方。え。る。を。云。ひ。の。う。み。と。何。と。云。説。て。盲。法。師。を。去
 る。と。暫。時。業。ど。居。る。ち。人丸父を。母。の。あ。り。と。身。を。借。ん。て。秋。一。と。做
 志。を。尋。回。へ。盲。者。の。仕。漕。一。お。り。ら。せ。細。ろ。不。借。り。教。ゆ。を。十。三。は。て。大。小。鷲。馬。且
 説。を。お。奉。り。盲。者。の。遠。き。陸。奥。の。人。丸。を。云。ふ。が。舟。師。不。舟。り。力。平。次。を。よ。く。知。る
 ぬ。と。云。思。ふ。お。母。の。陸。奥。の。人。丸。を。何。者。の。お。計。と。人丸を。白。引。さん。と。欺。ひ。く
 ありん。這。般。の。の。ま。が。速。小。退。退。け。ま。は。不。圖。危。難。不。入。ん。由。知。る。く。ま。と。今。還。来。

舟のち。衝と求裡。小立。入。目。を。本。く。これ。を。看。て。且。時。か。ら。小。還。来。ま。せ。り。と。
 席。不。孰。や。急。ぎ。ふ。ふ。休。ひ。の。ぬ。契。盲。者。の。巾。房。の。今。夜。の。宿。を。借。ん。て。前。刻。の
 小。叔。父。上。の。還。り。の。人。を。待。り。と。有。り。と。借。り。た。れ。ば。十。三。眉。を。あ。り。け。言。志。不。對。て
 云。へ。り。ら。ん。と。舟。師。の。東。國。より。京。師。に。登。る。驛。路。を。れ。ば。旅。店。由。り。と。を。れ。ま。ら。地。方
 の。披。と。一。人。旅。を。ま。り。の。不。免。と。宿。を。貸。す。ま。り。ま。ひ。て。我。等。の。の。あ。や。悼。り。と。の
 小。と。も。他。を。宿。を。求。め。ま。り。我。求。む。ら。人。ま。り。夜。園。ぬ。ち。ふ。と。と。ま。ね。と。を。素。氣
 へ。ひ。て。宿。を。貸。ぬ。が。盲。者。の。貸。て。去。赴。ふ。地。方。の。披。と。あ。り。ら。強。て。索。入。り。由。あり。と。と。や
 と。ま。ひ。て。あ。り。く。と。門。を。ま。り。と。お。り。く。發。又。送。て。十。三。人丸。小。對。ひ。て。云。へ。り。と。小。我。前
 刻。お。還。く。は。れ。も。お。と。今。の。盲。者。と。議。り。を。を。せ。ん。と。ま。り。の。父。の。亡。目。を。嘆。く。の。あ。り。と。
 あり。身。を。川。竹。に。洗。ん。と。ま。り。心。あ。り。と。徒。氣。の。そ。り。又。見。ゆ。れ。も。と。切。雅。て。世。の。間。の。物
 の。道。程。を。各。く。見。い。る。も。あ。り。人。丸。大。る。を。明。ま。と。あ。り。の。あ。り。と。景。清。が。身。不

我々もさういふ言あればよゝまきさういふ心も痛めると云懲されて人丸の勢が心の
 鈍くても大いなるを人漏れを悔ひ知らひて居るうらう斯う時にも前の盲者おろくと
 志て立戻りしるふ家ま小おや目今未だ所へ爾等の搭膊小官金を仮置忘れて去
 るうぬまごめても所ふゆひあえてさひねと云まごゆふ十三秘言邊をさうふ搭膊
 ずのおあさざれば人丸小素より志て爾等のおを又ぞと回心十三盲者の曲者と
 前よりして思ひいふさうの彼が謀小諂られら方見やと胸も終げといふあもい
 今夜をさう脱んと心不念と皆若小對ひ宣いますのおさふは是下おのりひて
 後他人さらふ来しるはし爾あれ人の取とあく有るさりのあえたれと今をさう
 搭膊の金足下のさく羞へて他家あや忘さめらん熟く思ひいふ中へ回心を以て
 盲法師もさう未だをさう他家あやまもあま今すく宿を以て焼くとやひ
 安堵しるも搭膊の金を思ふふその小女の官金のるを問やき首ふりけし。

搭膊を出し見せれば彼所よりおさくあくと再び来まごじあり。戯まごい
 らふこととあまあまありてさうさう十三人九法ともお誓言をたてくあまをさういふこと
 せとさうさうも承引を後お怒り憤り天日ゆが地ふ落む非義無道と人の心を
 奪つるもの安徳小女のをさういふあまごや今日の怒を知らせんと何方ともあまを
 十三とれを止んと殿を慕ひ立物かあび思ひ縛まを。被ゆるるを儲け斯う
 小縁はれ今去行を止めあまあま脱まぬ縁小宿んぬ知まごむ我が心ハ潔白
 あり。彼何れどの糸をのりて冤罪を誣いとも邪ハ宗勝がら是天理あり。勅止ま
 んとせむの疑こまえてのやある。石如契ま居んぬと立戻り戻りはれと心小か
 まごさう夜さう。睡まうぬるふ春の夜のいと寝て曉の鐘かろくと管吹かひ門戸
 慌忙く叩くふ十三咳然と身を起し。誰あらんと叫つ。立出て扉を披き。曉
 の星影小透し望るふ契里の村名伴の下男十三を又て慌忙く。縁故ハあり

くらぬと。縣の吏より命ありて。人々を呼集りぬ。且下も目今母をせよと。我を使ふ
 べし。いぬの法を急がたて。誘引てこそ去りあたる。人丸ハ眠り居りしが。
 其聲不尋らひ。起ぬる間ハ十三ハ村長が使小伴ふれ。ききも遠く去る。且下も
 殿影をえ送て。い叔父の身の不あやと心坐小せ。と泣より外のりぞは。
 中付程まで大勢が十三を中取圍て。其家の裡小井入つ。家の隈よりくふ
 捜索て立撥り。箕の子の下より一ツの摺腰をとり。ゆきくちかへし。こぞ
 皆老が失ひ。摺腰をえんと。爾れ裡小美金あり。この奈何ちつ
 ぞ。十二ハ何ハ知る。はしを詳小説せ。ゆれと證とまき。きりあられ。渾一
 叔父や。且下が言。語。何を多くとも。我輩の戈見。免さん。の。做りし。
 縣の相公の。前。あて。き。分。疏。を。ま。り。と。ま。び。十三を伴ひ。知縣。を。急。ぎ。り。
 人丸ハこれを見て。い何とあり。ゆき。あ。ら。ん。と。い。と。浅。猿。悲。し。と。思。ひ。ま。ら。せ。ば。幸

秋父母小別。と。あり。杖柱も。お。ろ。る。叔父十三が。今日。の。今。知。縣。小。幸。と。行。び
 遠。不。還。や。否。ゆ。や。永。き。別。道。と。も。あり。ゆき。も。せ。び。是。沖。小。漂。約。舟。の。楫。を
 失ふ。思ひ。を。泣。より。お。の。り。ぞ。あ。く。并。さ。あ。て。居。り。しが。あ。ら。て。心。を。収。思。ま。う
 叔父あ。ら。由。十三。大人。ハ。親。お。均。き。鴻。思。あ。ら。今。知。縣。小。幸。と。の。ハ。我。と。あ。く。て
 一。も。あ。き。盲。老。を。優。恤。と。り。し。り。り。起。り。故。あ。れ。ハ。叔。父。上。を。暫。時。間。も。困
 さ。さ。さ。さ。る。や。あ。る。罪。科。ハ。叔。家。不。あ。る。の。を。つ。や。あ。ら。し。知。縣。公。へ。明。白。不。せ。の。あ。け
 て。身。を。り。り。叔。父。上。小。代。ん。の。心。を。決。り。知。縣。の。體。を。し。甲。斐。と。急。げ。ど。知。縣
 行。尋。常。あ。ら。ぬ。小。女子。の。心。賢。く。雄。々。と。い。の。実。や。平。家。の。内。内。あ。て。精。忠。侍。の
 あり。たる。熟。七。無。滿。景。清。が。女。見。と。知。る。き。拳。動。あ。ら。人。丸。ハ。心。中。不。道。を。急。げ。ど。知。縣
 の。體。ハ。何。地。と。知。る。が。途。行。入。小。尋。問。ひ。歩。過。て。ハ。立。戻。り。或。ハ。小。路。を。沿。り。て。多
 く。も。隔。て。ぬ。所。あ。れ。と。思。ひ。の。か。小。隙。が。て。衣。を。び。あ。く。ゆ。あ。れ。と。辛。ト。未。の。下。割。ふ

覚の涙不暮るが熟し思ひ多きなり我より父の為身を信じて思ひしより。大恩の
叔父の禍のかる難儀なるをいさむるを援けざる父と叔父とを換ふる後と今ハ
叔父が厄難の爲身を川竹に沈めて援けひくふが父親の身の上も自ら易き事
かたし心不念に村長に對ひ其身を信じて十二の冤罪を援けられと只顧ふれに父の
さへ村長に感激し。數度回嘆息し。世にありかた小女も志と氣を失ふる小女
俱く力をそくし十二を援けざる。と村母に肯ひたれば人丸もあはれびてとく計
めらばと頼み急しおむす村長に里人のうち小女もあはれびてとく計
あるまじと氣のなさを洩し知らし。其良志と氣を果させぬあはれびてとく計
して望むが命をいさむる。心小女もあはれびてとく計。宣ぐ多くありたる人丸が志氣
清く感し預むるを果せるを思ひ多し。時不入を志と氣を失ふる小女が
望むを遂せしむ。佳由のひたれも。まじり年記ゆるぬのあはれびてとく計。

かゝん。今思ふところあり。今大磯の里ハ京鎌倉小三坊に娼家多し。いふふ
戸平次が承ハ豊山てある十二といふと睦し。このものを救ふひたれ必し命を
あつて。他小女ハ容易ありと多し。村長見ふと。且下よもあはれびて。雨あは
人丸を相俣して戸平次が許小躰。天下あはれびて。戸平次を救ふとく計し。村
長の影むある。人丸が志氣を憐し。渾一般小兼引て人丸とく連目。あ
戸平次が許小躰。且あ源氏の公達小を惜し。文平氏の殿小桑中
の樂をま。知ひを就し。娼を隣り。憂川竹の身の上ハ秋時の求食村鳥の涙木小
はきま。黎小はき。源二位頼朝卿。鎌倉小居をとり。あ
大磯小磯。手越。娼家街を建連。花街あり。それが中。あ
大磯あり。戸平次が承ハ名妓。鎌倉中の若殿。京越。戸平次通。小女が
あづから栄え。戸平次が承ハ。前小女。回説。貪欲邪見ののり。

男と女
夫と妻
ひ
二百金
の
價



小
雪
丸
山
孝
心
の
價



産を破り身を危ふまると再三不及びしと毒の小者が賢わよりて危きを免ま
 復古して今東富を做不至まると二編小説がごとく尾張の内海不居し耐忠を
 りて景清と思ひ得て捕へし罪あり既小刑不所せしむぎを妻小雲を嘆
 志氣をそそぎ真心を十二深く感激して罪を贖ふを乞ふ死を免らそゆ人を
 りて今女地方不居を授へ又故の娼女ありをよめ後の娼妓を置し小者これを
 深く優り忠中不教へ諭せしむとこれ不感伏し客人を款待し大さあふる等
 かり多れば其家不通小客人の自ら多くて返るる限あり年月を積んで東富
 不従ひて名妓も数多出来今日返頃の京送念ふ名をゆら娼女ふもせしむる者ぬ
 尤景あり斯福ありあふるあふる志氣の改りて誰不移り行なふを欲し限りの
 あらぬりのあてを真しき時女妻小者か休を聴て僻あり苦不心の赴くふやとあひの
 不不激くと昔の貧欲邪見あり奉動のまふれば妻の深くこれを秋心の時練

をつれも身くこれを拒むる勢ふ阿古屋の夫の思ひ續けて病あかしく遂ふ
 むもくろし后子入丸う容貌のいと美麗優しきを熟くして人の裡ふ其ふ
 を我衣不買うてよく養ひ育てて名譽の娼妓ふあふると思ひほしきよう
 生質の依智忽ち浮びおぼし心の慈漢を相借して謀を示しこれを盲者不扮お
 せ一個の愚計を用ひしふそこのゆく行しれ十二擲の身とあふる人丸これをほく嘆き
 我身を信て十二が罪科を贖ひ助んと村長と相浅し隣伍の輩と徳も不今平次が
 伴小来直バ戸平次これを見心裡ふと我妹の成びいと察ふおびこれを逆西妻の小雲
 秋夫の謀とを悉知しむは日十二皆老のよめ不冤罪不捕らまるとせ教驚きまふ
 其人が我夫の恩人といふもて援ふやと免さぬ角かぬを芳し思ひ惱めて居る
 処へ思ひもつむ里人おの人丸を俱して来りしれいと訝してそそ出丸丸小對ひ云り
 たるんおんの叔父は十二の昨日知縣相公ふ石と今不還り来まらふとせふとせふも

平次心づき。実不雨るものあんあれと。それを思はて人々のちよまうて人丸と。
 今しを女とて支えられが。まおむび不絶むして急がうたてり。里人ハ金を携へ人丸を。
 伴ひ連れに慌忙く。知縣へと急ぎ行り。

(Faint bleed-through text from the reverse side of the page)

景清
 外傳松の操三編卷之三終

